

うしお

第 92 号

昭和 39 年 7 月

目 次

正 月 休 み に	別 府 義 輝	1
アユ養殖の手引(その4)	大 口 養 漁 場	3
1 2 月 の マ グ ロ 延 縄 漁 況	漁 業 部	9
定 置 観 測 (1 2 月 分)	養 殖 部	11
漁 場 観 測 速 報 (1 2 月 分)	"	13
一 般 漁 況 (1 2 月 分)	漁 業 部	17
各 部 の 動 き	編 集 部	19
漁 村 の バ カ ン ス	北 山 易 美	21

鹿 兒 島 市 城 南 町 20 番 12 号

鹿 兒 島 県 水 産 試 験 場

正月休みに

別府 義輝

風雪にめげぬ竹，霜を貫いて直すぐに天を指さす竹の強さは，その規則正しい節々に貯えられるものだという譬え話は，やけにだぶつ広い小学校の講堂の板敷きと，所々に穴のあいたガラス窓越しにサツサツと走る冬雲との取合せの中で，ふと浮き上つてくる幼い日の正月のイメージの一つであるが，今は早やそんな訓話をしてくれた校長先生の顔も思い出せない。こし方行く末の程もさだかでない此の岩清水に似た想念は，時間とか空間を離れた虚空の中で飛び去ることも，落ち果てることもなく唯ヒラヒラと舞う。

いさゝか女学生の作文めいて，不惑初老の年甲斐もない次第ながら，人の性は幼にして定まると云い，寧ろ胎にして定まるのではないかと反論したい程の宿命論者的性向から，この種の想念は大事にすることにいる。それは自分の血液からの滲出物ともいべき本然性を培地してとして枯れることもなく自分の中に数十年間生きつゞけてきたものだからである。西郷先生は夢を大事に考えられた由であるが，胸底かすかにたえ入るような岩清水の音を夢という。

マイクロフォンにかけて聴き取るという操作に忠実であられたらしい。月とスツポンでお笑い草だが，彼と我とを一たび同じ生物群集として捉えれば，殆んど見分けもつくまい。物ごとの外見上の値打はその価値判断の立脚点のちがいによつてさまざまに変わる。まして認識の主人公であり，人性無発現の素となる遺伝因子の組合せを無限と考え，時間空間共に無限とすれば，物ごとに絶対価値などというものがあろう筈がない。

あくせくとした日々の営みは，あくまでも特定条件の下での見かけ上の長さ比べにしかすぎないので，実は人の人たる値打は，この条件の設定のしかたの中にあるといえよう。

人はともすれば、肉体の求めが余りに急であり切実であることに心奪われて、日と日の境、年と年との境さえ忘じ果てる。

陽が昇り、陽が沈み、地軸が傾いて又旧に復する自然のさりげない営みは、人に人たるの沈思と、竹の節のようなエネルギーの蓄積とを得せしめんとする天のいぎないであろう。

アユ養殖の手引（その4）

2. 給餌と飼育

ア、餌料

魚の成長は餌料の質と量に左右される。天然では餌料となる生物または無生物を移動しながら求めている。養殖池では多数の水族を限られた面積内に放養し餌料を与えて成長をはかるので最も効果のあるようにしなければならない。

生産費の中で一番大きな部分を占めるので、餌料の研究が一番大事なことだと言える。

- ◎ 健康に育ち斃死魚を出さぬこと。
- ◎ 発育をよくすること。
- ◎ 餌料費を割安にして生産原価を下げること。
- ◎ 餌料の入手保存が容易なこと。

以上の条件を具備させるためには餌料の成分、品質、配合、調餌法、給餌量等を魚の成育の過程と池の条件に応じて適合させていかねばならない。

養魚池の地域差に伴う気象条件の変化の影響や地質に伴水質の相違、天然に補給される餌料生物の種類や量の差の外に、池の広狭や注水量の多少、放養密度等によつて条件が異なるのでまだそれぞれに応じた餌料の研究を完成していない。

最近養魚餌料は栄養化学的な基礎に立つた配合、加工が行われるようになり、マスやコイなどでは相当高度な完全配合餌料が市販されるようになった。アユの場合も現在研究段階であるが、基礎用としての粉末配合餌料は市販されている。

魚の餌料といえば昔ながらの廃物利用あるいは蛹などぐらい考える向が多いが、集約的にしかも企業性をもたせるためにはやはり蛋白質、炭水化物、脂肪、微量栄養素、無機物と栄養の成分についても知る必要がある。

餌料の単独給与は栄養分の過不足を生ぜしめ病気や斃死減耗を起すことから配合も複雑化してくる。

また餌料の品質も栄養効果を支配する。同じ種類の餌でも品質によつて栄養効果を異にし、変質したもの、腐敗したもの等は、その成分の一部が有毒物に変つて魚を害することがあるから、餌料の購入及び保存には注意しなければならない。

配合には魚の成育の度合や健康度、池の状況や個々の餌料の含有成分により種類別配合比が考慮されると共に、魚の嗜好や水中溶解損失を少なくする等の点も考えて決められる。従つて餌料配合は夫々の場合に応じて決定するもので、単純に何々をどの割合で与えれば良いときめることは現在一般に使用されている餌では不可能である。従つてその地方で入手しやすいもので動物質と植物質の餌料を色々配合して栄養もあり、消化も良いまた採算もとれる餌をつくつて与えることになる。

アユの人工餌料としては次のようなものが普通使用されている。

a、動物性餌料

魚肉及びその内臓・・・鮮魚又は冷凍ものが良い。塩蔵魚は塩抜きし、鮮度の悪いものは煮熟して与える。

あぶらやけや舌を刺すような鮮度のおちた魚を使用すると病気をだす。

蚕蛹・・・乾燥物は流水につけ又は湯たきして軟くして与える。蛹は昔から栄養価の高い養魚には必ず用いられていたが、最近蛹の脂肪変質がはげしく病気の原因となることが知られ、北洋魚粉の出現で次第に利用が少なくなつてきている。

いさぎ（あみ）・・・生鮮品は入手困難であるから普通煮干又は素乾を使用している。購入にあたつては新しいかどうか注意する。体形がばらばらになつたり鼻をつく悪臭のある

ものはさける。

魚粉・・・養鶏などに使用される褐色の魚粉ではなく北洋で作られるホワイトフィッシュミール（白魚粉）が高価ではあるが、栄養的にも魚を健康に育てる点からも優れている。最近ではほとんどの養魚の基本餌料（ベース）となっている。

b. 植物性餌料

小麦粉・・・澱粉類を主目的とし、餌の池中溶解を防ぐため粘着剤の役目をさせる。煮熟加熱して使用する。

 碎 麦・・・・・・・・全上

 大 麦・・・・・・・・全上

 馬鈴薯・・・・・・・・全上

 ぬ か・・・・・・・・ビタミン補給の役をする。

古いものを使用すると病気にかかる。多量の使用は病気を出すことがある。

c. 完全配合餌料

最近各養魚餌料会社が完全配合餌料と銘うって売り出しているが、いずれも粉末餌料で水などでねり合わせてやれば良いことになっているが、まだいろいろな点からこれを単用することはすすめ難い。やはりこれは基礎餌料として他と配合して用いるのが良いようである。近い将来には養鱸や養鯉で使用されているペレットができてくるだろう。

d. 薬品類

ビタミン剤，消化剤，サルファ剤等を病気の予防，治療法として用いる。

イ. 調餌の方法

動物質の生鮮な原料は鮮度をおとさないようにして生のまゝ使用し、澱粉質を主体とする麦類，薯類等は煮熟して加え混合した後調餌機でカクハン細断する。

キ、調餌機・・・普通32番～42番のチヨツパーに1～3馬力位の動力をつけたものを用いる。目板は5厘目から1分目位を使用し、1～2回位かける。

チヨツパーの使用にあたっては充分注意する必要がある。特に切れの悪い場合に手を入れて指先を切断した例がある。また金属棒等で餌を押し込む作業して喰い込ませ、チヨツパーを損傷することがある。

餌料の鮮度・・・調餌後の餌は腐敗発酵し易いので直ちに投与することが大切である。腐敗したものはその成分も餌としての効力も変わり、餌が腐敗すると有毒成分ができて魚に病気を起すことがある。

ロ、給餌料

給餌料は餌の種類、調餌法、水温、魚の量及び飼育計画等により相違する。

餌の種類・・・一般に生餌は消化が早く、乾燥加熱したものでは遅いのが普通である。

調餌法・・・細かく砕きつぶして与える方が消化も早く魚の為にもよい。粗粒の餌は病気の原因となる。

水温・・・適水温中では水温が高いほど早く消化し、低い水温では消化が遅い。殊に低水温時の餌の不適當と過食は病魚をつくることがある。

天候・・・風向、晴雨等は試験の結果、摂餌料に大差は認められなかつたが、水が濁ると視力の関係か摂餌が少なくなる。

飼育計画・・・市場の盛期に適当な大きさに成育させるため、餌の量を控えて成長をpushしたり、給餌料を増して早く成育させることも考えなければならない。

魚の量・・・平均魚体重に総尾数を乗じて飼育魚の総重量を出し、この総重量から毎日の投餌量を算出する。

もちろんこの数字は大体の基準で後は摂餌の状況によつて決める。

餌の種類によつては水に溶解して捕喰されない部分があるからこの分も若干見込んで給餌料を増す。

餌の量についてはニジマスでは生餌，乾燥餌について夫々水温，魚体重別による給餌率が作られているが，アユについては未だ確定したものはなく各地さまざまである。普通書物によると魚体重の3%～10%（乾燥餌）となつてはいるが条件がよく食べるだけ食べさせれば20%～30%も食べるとも言われる。

いずれにして前に述べた点に留意して水温が20℃前後あれば食べるだけ食べさせしかも損失のないようにすることである。

配給率についてもどんな餌をどれだけつつ混合するか一定のきまりはなく条件に合ったものを夫々使用しているに過ぎず完全配合餌料の問題も盛んに研究されているので近い将来には実現するであろう。

こゝに38年当養魚場で飼育したアユの毎日の給餌量から6月1日の分を拾つてみると次表のようになる。

これは餌料配合の一例にしかすぎず，在庫餌料等の関係からこのよになつてはいるのであらかじめお断りしておく。

あゆ 給 餌 量

昭和38年6月1日

品 名	数 量	単 位	配 合 率	備 考
干 あ み	2.7	K	5%	
鮮 魚	22.0	"	40"	
魚 粉	2.7	"	5"	北洋産 ホワイト・フィッシュミール
蛹	8.3	"	15"	
甲ミール	5.5	"	10"	配合餌料粉末
小 麦 粉	7.2	"	13"	加熱（最低価のもの）
米 糠	5.5	"	10"	
小 麦				
				推定魚体重
				給餌率
				水温
				給餌量
				210K 26% 18℃ 55 Kg

38年には魚粉（ホワイトフィッシュミール）の入手ができず生魚を主体に蛹を従とした関係で、餌料に基因すると考えられる病魚を出した。39年には次の配合率で斃死を防ぎ、はん雑であつた調餌を簡単にしたいと考えている。

(品名)	(配合率)
干あみ	時期的に5~10%配合
魚粉（北洋産）	5.0%
配合餌料	3.0%
小麦粉	2.0%
添加ビタミン	（若干）
生魚	外20%位たまたに配合

調餌の順序としては、まず小麦粉を煮るのであるが、次の方法によるが良いようである。はじめ湯を沸かし火を除いてこの中に規定の小麦粉を入れ団子状になる位の固さにねつてこれをとりあげ冷却させる。「註」熱いうちに生餌と混合してチヨツパーなどにかけると夏などに腐敗を促進するものである。

他のものでは蛹、干あみは30分位前から水に浸して混合魚粉、配合餌はそのまゝ混ぜ、これをよく混合するようにして適当な固さになるまで水を入れてチヨツパーにかける。軟らかすぎると水中ロスが多い。適当なかたさは耳たぶ位であろう。

（次回へ）

大口養魚場 小山鉄雄

12月のマグロ延縄漁況

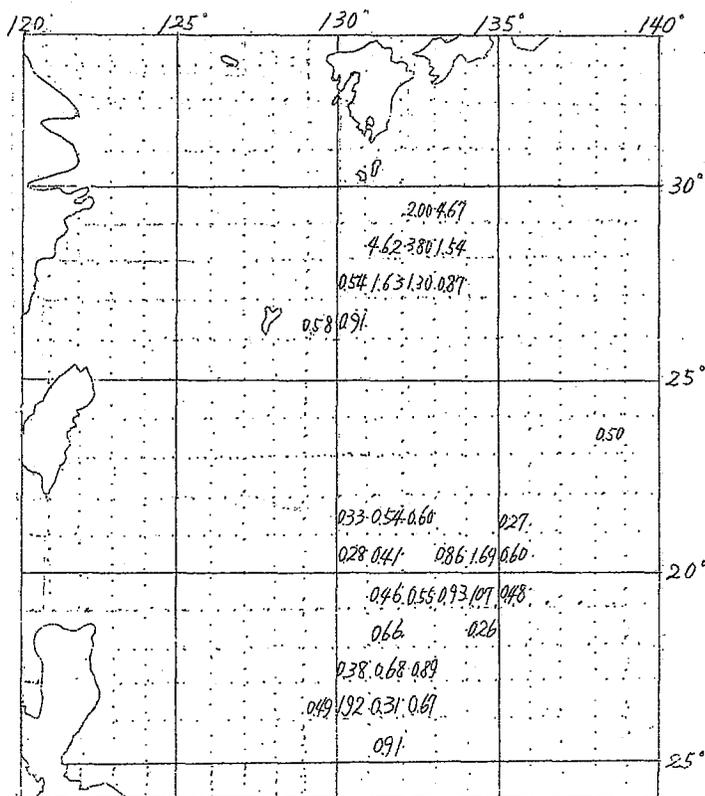
漁業部

12月に入りビンナガ漁況は活発となり市場は入港船で活況を呈している。

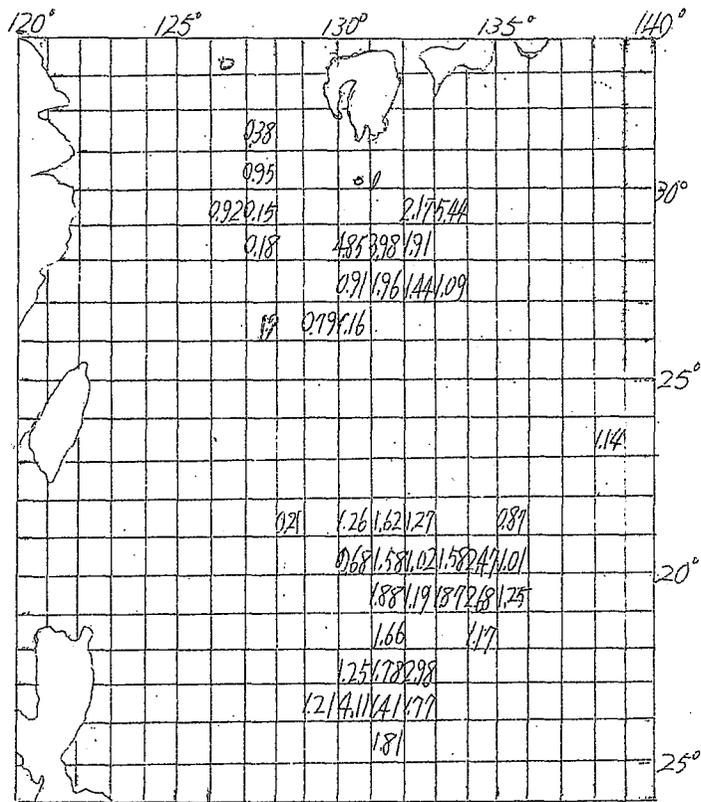
12月調査船は21隻。漁場は11月と大差なく、漁獲物は総体にキハダが少くなりビンナガが多く44%程度となつている。15~22°N, 129~136°E附近と喜界島近海が主漁場であるが喜界島近海では釣獲率4.67という高い値も見られる。

又一部の船は東支那海漁場で操業しているが大した漁獲はないようである。

ビンナガ釣獲率 (昭和38年12月)



マグロ・カジキ計釣獲率 (昭和38年12月)



定置観測（12月分）

養殖部

○ 旬別平均水温，比重（満潮時観測）

旬	表面水温 ℃			換算比重 15		
	平均	前旬差	平年差	平均	前旬差	平年差
上	18.43	-1.13	-0.78	26.84	-0.28	+0.70
中	17.51	-0.92	-0.82	27.13	+0.29	+1.06
下	17.35	-0.16	-0.11	26.98	-0.15	+0.66
月平均	17.80	-2.51	-0.66	26.99	+0.01	+0.25

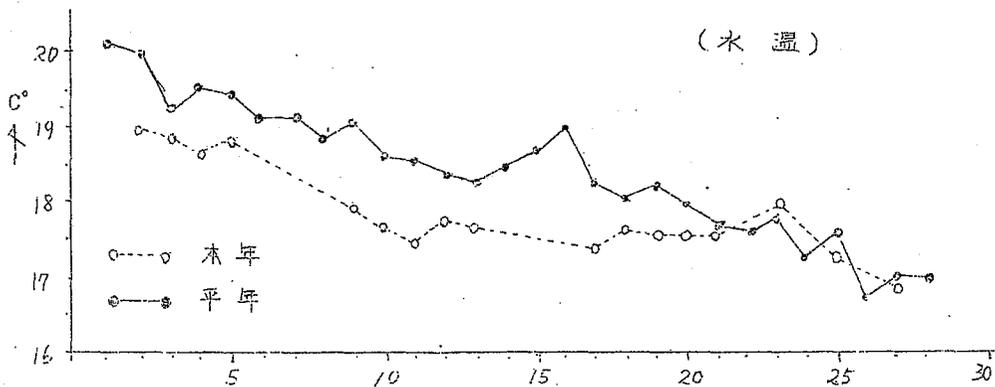
○ 水温

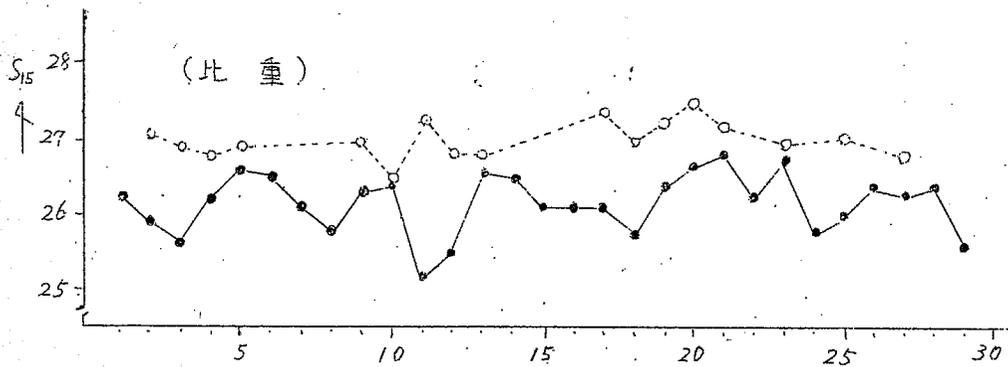
16.8～18.9℃の間にあり，平年に比べると上，中旬は約0.8℃の低目を示したが，下旬では横這い状態となり平年並の水温となった。月平均水温は前月より2.5℃低下し，平年値より0.6℃低目となっている。

○ 比重

前月に引続いて26.5～27.5と高かんが続いて殆んど変動のない安定した状態である。月平均値は26.99を示し，前月と大差なく，平均値より0.2高目となっている。

12月の水温・比重の変動





漁 場 観 測 速 (/ 2 月 分)

養 殖 部

1、旬別平均水温

観測地	葛 輪		水 成 川		里	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上 旬	18.5	18.3	20.9	20.2	19.3	17.4
中 旬	17.7	17.1	20.5	19.9	18.4	17.0
下 旬	16.7	16.2	20.9	20.4	17.4	16.2
月平均	17.6	17.2	20.8	20.2	18.3	16.9
前月差	-2.9	-3.1	-2.1	-1.8	-2.5	-3.1
前年差	+0.7	+0.9	+0.9	+1.8		

- 葛輪の月平均水温は17.2～17.6℃を示し、前月に比較して2.9～3.1℃低く、前年同期に比較すると16.9～16.2℃で0.7～0.9℃高目となっている。
- 水成川の月平均水温は20.8～20.2℃を示し、前月に比較して2.1～1.8℃低く、前年同期に比較すると19.9～18.4℃で0.9～1.8℃と何れも高目となっている。
- 里村の月平均水温は16.9～18.3℃で、前月に比較して3.1～2.5℃低くなっている。
- 西日本海況1月上旬報によると、南西諸島や九州近海等の黒潮流域では平年よりやや低目のところがあるが、今のところ季節風の吹出しが少なく、水の動きがかんまんのため余り大きな変化はなく、ここしばらくは平年よりいくらか高目の水温が続きますようのこと。

1、葛 輪

月 旬	上			中			下			計
	有漁 日数	延出漁 船 数	漁獲量	有漁 日数	延出漁 船 数	漁獲量	有漁 日数	延出漁 船 数	漁獲量	漁 獲 量
タ イ	10	103	470	10	159	464	10	192	440	1374
ブ リ	4	49	125	8	139	345	10	192	335	805
イツサキ	1	10	12							12
雑 魚	2	4	140	1	3	80	9	34	765	985
計		166	747		301	889		418	1540	3176

2、水 成 川

月 旬	上			中			下			計
	有漁 日数	延出漁 船 数	漁獲量	有漁 日数	延出漁 船 数	漁獲量	有漁 日数	延出漁 船 数	漁獲量	漁 獲 量
タ イ	1	5	40	4	19	308				348
シ ビ	3	14	80	5	29	340				420
雑 魚	2	10	180				9	34	690	870
イセエビ							1	3	25	25
計		29	300		48	648		37	715	1663

3. 里 村

月 別	上			中			下			計
	有漁 日数	延出漁 船数	漁獲量	有漁 日数	延出漁 船数	漁獲量	有漁 日数	延出漁 船数	漁獲量	
フリ ヒラス	8	85	630	5	60	375	4	48	290	1295
ヒラス	8	8	2434	10	43	3642	10	10	2338	8414
スズキ	1	1	30				1	1	15	45
キビ ナゴ	1	1	4900				1	1	3500	8400
瀬 魚	5	33	930	8	48	1680	7	56	1980	4590
水イカ	1	5	30				3	11	90	120
エビ	3	24	70	8	64	250	7	56	340	660
カジキ							1	1	50	50
サワラ							1	1	20	20
計			9024			5947			8623	23594

○ 葛 輪

総漁獲3,176 Kgでこれを魚種別にみると、タイが1,374 Kgで43.2%を占め、次に雑魚、ブリが31.0、25.3%の順となつている。これを前月と比較すると約2.1倍の増取となつており、又前年同期とくらべると1,435 Kgであつてこれも2.2倍の漁獲をみている。魚種別にはタイが今年1,374 Kgで前月より1,061 Kg、前年同期より588 Kg多くの漁獲をみている。

○ 水 成 川

総漁獲1,663 Kgで、前月より790 Kg減となつている。これを魚種別にみてみるとタイが652 Kg減となり、更にはかガツオ、サバの漁事がなかつたことが目立つている。又これを前年同期と比較してみると、1,813 Kgでこれも140 Kg減となつている。魚種別にはシビが1,743 Kgから420 Kgと76%減となつている。

○ 里 村

総漁獲 23,594 Kg となり前月 14,080 Kg と比較すると
9,514 Kg 増加している。これを魚種別にみると今月もブリ、
ヒラスの豊漁が続き 9,709 Kg で 41.1% と首位を占め、次に
キビナゴが 2 日間で 8,400 Kg で 35.6%、瀬魚が 4,590 Kg
で 19.4% となり次はエビ、水イカ、カジキの順となっている。
特に今月は、僅か 2 日間であつたがキビナゴが 8,400 Kg 漁獲
されている。

一 般 漁 況 (/ 2 月 分)

○ 東海サバ跳釣

当月の入港船数は / 6 隻，漁獲量は 248,45 / Kg， / 隻平均 / 5,528 Kg。漁場は農林 534 区，535 区が主たる操業海区であつた。 / 2 月の漁況を 32 年から 38 年までを比較すると次表のとおりで，今年の / 2 月が最も不振である。

年 次	/ 夜 / 隻平均漁獲量 Kg	/ 夜 / 人当り漁獲量 Kg
32	7,395	178
33	5,934	151
34	2,483	67
35	3,723	86
36	5,965	206
37	5,069	184
38	1,880	64

○ カツオ一本釣

今月の中旬頃から / 月上旬にかけて各船一本に上架修理のため，入港船は少くなつた。枕崎で 9 隻 378,000 Kg，山川は 7 隻 127,000 Kg。

漁場は台湾から八重山群島。大判が 80%，中判が 10% である。

○ 旋 網

今月は上，中旬は活発な操業で順調な成績であつたが，下旬になつて時化の日が多く不振であつた。枕崎港の片手巾着は 55 統 85,700 杯，串木野港の双手巾着は 38 統 16,760 杯であつた。漁場はともにこしき島の西沖と野間岬沖合である。

○ ブリ飼付

漁場は笠沙町の野間池，山川町の梶ヶ瀬，平瀬（いずれも鹿兒島湾口）で順調な操業を行つている。鹿兒島魚市場には野間池から毎日平均 400 尾が入荷されている。魚体は 5 ~ 18 Kg。

又山川町漁協には平均80尾の水揚げがある。魚体は4~9kgが大部分である。

○ 曳縄漁業

ヨコワの主な漁場は鹿児島湾口，開聞沖，枕崎沖であつて，漁況は低調である。魚体は2~3kgで11月と大差ない。ヨコワ大群の洄游は期待出来ないようで，当業船も漁場を変えるか他の魚種を対象に移るかが考えられている。一万宇治群島にはカツオ類，ブリを対象に操業され稍好漁である。ここでは岩礁地域の極く浅海域で豊区の差がひどいようである。

○ ブリカブシ釣

11月下旬から12月上旬に宇治群島家島南東^場漁でヒラスの好漁があつた。某船は1日に100~200尾を釣獲したとのことで20隻余り出漁している。しかし日により漁模様^場に不同があり，中旬に入って少々落ちた様である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

※ 漁 業 部

- / 2月 / 2日「かもめ」はブリ曳縄試験のため出港，宇治群島附近調査，途中阿久根沖の大型魚礁の設置調査を実施する。
- 宇治群島周辺は，ヒラス，カツオ類を対象に数隻出漁し好漁している。又こしき島周辺から宇治群島の鷹島にかけて，曳縄，一本釣でブリ，ヒラスの好漁があり，本格的漁期に入ったようである。
- / 月 6日 照南丸は東支那海の漁況海況海洋観測のため出港 / 4日帰港。今回はサバの魚探反応は全然みられなかつた。はね釣船は26°-30'，122°-50'附近で好漁していた。
/ 6日，冷水対策調査のため出港観測中。
- / 月 / 3日「かもめ」はヨコワ曳縄試験のため崖久島，口永良部島へ出漁中。

※ 調 査 部

- 昭和38年8月から垂水市牛根で実施していた海産魚蓄養適種試験は / 2月26日をもって第 / 回試験を終了した。
チダイ，カワハギ，イサキ，マダコ，イセエビ，ガザミ等の供試魚は経済効果判定の為，鹿児島市中央市場に水揚げ販売した。
試験結果については目下，資料作成中，詳細な点については次号に記す。
- 37年度事業報告書は9月に原稿作成し， / 2月下旬，製本が出来たので，各都道府県関係機関に送付した。

※ 製 造 部

- 加工原料としてのカツオの凍結貯蔵に関する試験
(鹿兒島大学水産学部共同試験)
-10℃, -20℃ 2ヶ月凍結貯蔵したカツオの解凍処理条件が製品の品質に及ぼす影響について試験。
- アジ煉製品製造試験
アジを原料とし, 蒲鉾を製造, 坐りの温度と時間が製品の品質に与える影響を調査。
- 真空包装による煉製品の保蔵試験
クレハロン・ポリセロ封入, 真空包装, 再加熱による煉製品の保蔵効果と併せて再加熱温度と時間の影響について試験, 保蔵効果については試験継続中。

※ 養 殖 部

- 近年盛んになつてきたワカメ養殖は, 東町で培養した種苗縄の芽胞体発芽が悪く, 山口県種苗センターから約1,800mを購入し各地とも12月20日頃展開して今後の伸長が期待されるが東町葛輪地先の試験筏は12月17~18日ワカメのほかアオワカメ, ヒロメも養殖した。
- 11月28日と12月1日にこしき島里村にて産卵孵化したクロアワビの幼生を12月6日当水産実験室へ海上輸送しその後, ガラス, 塩化ビニール, 陶製の各水槽で室内飼育を続けているが, 11月28日孵化した幼生は僅か24個であったがヒーターによる水温調節に失敗死滅させたが12月1日の分については1月17日に検鏡の結果上足の分化もみられ殻長570~835μに成長している。

＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆
＆ 漁 村 の バ カ ン ス &
＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆＆

北 山 易 美

岳々は雪，下々は飲ん日和という言葉がある。冬期浜の古老たちの間に交される言葉で，自ら決めて休むことである。云うなれば漁民のバカンスである。（休むことをヨクと云うこともある）

漁村の人は凧であれば夜は漁に出て夜明と共に帰ってくる。そして休む間もなく次の出漁の準備や網繕いで文字どおり朝星夜星の稼業である。冬が来て北西の季節風が吹きすさむ，開聞岳や霧島山の頂きが白くなる，3日も4日もシケ続きで沖には出れない，毎朝空を眺める，西空に雲がかかっていると“今日も西のタンタン吹きぢや”とあきらめる。風よけの所に2人3人と寄つて漁の話や船のこと，世間話に花を咲かせるうちに衆議一決“飲もうや”となる。即ち岳々は雪，下々は飲ん日和となるのであつて一名黒ぢよか日和ともいうが（黒ぢよかは焼酎にかんをつける容器）要するに天候の悪いことにかこつけて焼酎を飲もうということである。

ふだん飲むのは晩酌に限られているから漁師以外の方が昼間から飲むことは兎角批判されるけれどもこの場合は公認の飲ん日和と解され，自からもそう解しているのである。また朝星夜星という休む間もない稼業であるから飲ん日和となると作業をしないので躰も休むことから一名骨休ンともいう。

農村では骨休ンとか，バネ休ンという。バネというのは手足の動くのをバネにたとえたのであろう。今は少くなつたが以前は地主といわれるような農家に作男として年期奉公で徴兵検査まで働く人が多かつたがその頃作男をデカン，女中奉公の人をメロといつた。デカンの仕事は野良のことから家畜の世話まですることになつていて使役する馬の肥りぐあいでデカンの腕の良否が決めら

れるほどであつた。しかし別に休養日というのがあるわけではない。休むのは盆と正月だけで年から年中馬草馬式に作業に追れて休養は雨の日だけであつたので雨はこの人たちにとっては待望の雨というわけ、2日も3日も続いて降つてくれた方が良かったのである。このことから雨の日をデカン日和という。

鹿児島民謡おはら節の

おけき働け でねんの 春は
とのじよ もたせるオハラハ一よかにせを
おかた、もつちやはんか よかとおんど
仕事や好かんとの オハラハ一朝ねごろ

何れも当時の彼等にじようだんまじりに唄いかけた歌詞である。

種子島の東海岸や佐多町の東海岸の漁村部落にシバ日というのがある。避地で部落が孤立したところであるが斬様な所では学校やお寺の行事、或は部落行事などはすべて部落全体でするしきたりになつている。勿論医者もいないし散髪屋もない病気になる大病でない限り越中薬かお冬ですませ、散髪は隣同志交代でやるといつた相互扶助の習慣であり、制度になつているがもし部落内に死亡者があると漁業も畑仕事も休んで部落全員でお弔いすることになつている。このように部落全員が家業を休まねばならない日をシバ日というのである。前日か或は当日になると今日は誰が亡くなつたからシバ日と戸毎に伝えられ、もし谷向いにノ軒家でもあると小高い丘の上から「今日はシバぢやつど一」と大声で伝えるのである。

最近このような避地でも有線放送や拡声機があるので丘の上から大声で叫ぶ必要はないけれどもシバ日の制度は硬く守られている。シバ日の語源についてはまだ知らない。

部落の行事や葬式のために畑仕事も漁業も休むシバ日であるけれどもシケで漁に出れない日になると諧ぎやく的に今日はシバぢやと笑いながら休業する。そして頬は頬を呼ぶでたちまち数人が

集つて黒ぢよかということにしているが、慰安も娯楽設備もない
避地寒村では無理もないことと思う。飲ん日和も骨休ンやデカン
日和もそしてシバ日も農漁村のバカンスである。(鹿児島県漁業公
社専務取締役)

註) 上記の歌詞は鹿児島語のため県外のかたには意味が解
されないと思うが、おけさは女中の総稱的な呼名でけさ
どん、えだどんと呼んでいたのである。でねんは来年；
とのじよは夫，よかにせはハンサム，おかたは妻，もつ
ちやはんかは結婚しませんか，よかとは良い娘のこと
である。